「神によって義とされる者」

ルカ 18:9-14

2020.5.24 南与力町教会朝拝

序論：問われる祈りの姿勢―神によって義とされるために

今日の箇所は前の箇所と「祈り」というテーマで共通しています。前のところでイエス様は「やもめと裁判官」のたとえを弟子たちに語られましたが、その目的は彼らが「気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるため」でした。人の子であるイエス様が来られるまで失望せず、落胆せず、祈り続けるようイエス様は教えらえたのです。では、とにかく祈り続けてさえいればそれでよいのでしょうか。実はそうではないということが今日の箇所では教えられています。今日のたとえには二人の人が出てきます。ファリサイ派の人と徴税人です。そして二人とも神殿に来て祈っています。しかし、「義とされて家に帰った」のは一人だけ、徴税人だけだったのです。それゆえ、今日の御言葉は、私たちがどのように祈るべきか、どのような「姿勢」で祈るなら神様によって義と認めていただけるのか、そのことを教えています。祈りに現れてくる私たちの姿勢、態度によって、神様に義と認めていただけるか否かが決まるのです。

①たとえの内容とポイント―ファリサイ派の人と徴税人の祈り、神の判定

・たとえが語られた相手(18:9)

イエス様はこのたとえを「自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々」に対して語られました。「うぬぼれて」と訳されている言葉は、「自分自身により頼んでいる、信頼している」という言葉です。「自分は正しい」と自分自身により頼み、信頼している。自信を持ち、確信している。そういう人々です。そして同時に「他人を見下している」のです。「他人」という言葉は「残りの人々」という意味です。自分たち以外の「残りの人々」を見下している、軽蔑している。そういう人々に向かってイエス様はこのたとえを語られました。

・ファリサイ派の人の祈り（18:10-12）

18 章 10 節

「二人の人が祈るために神殿に上った。一人はファリサイ派の人で、もう一人は徴税人だった。」

当時、神殿は「祈り」の場所でもありました。二人の人、すなわちファリサイ派の人と徴税人が「祈る」ために神殿に上ってきたのです。

そしてまずファリサイ派の人が祈ります。11 節 12 節

「ファリサイ派の人は立って、心の中でこのように祈った。『神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています。』」

彼は祈りの中でまず「神様、あなたに感謝します」と言っています。感謝そのものは祈りの大切な要素です。しかし彼の場合、その感謝の内容に問題があったと言えるでしょう。彼が感謝しているのは、自分

が他の人たちのようではないこと、すなわち奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者ではなく、また、この徴税人のような者でもないことを彼は感謝しています。彼は祈りの中でも横目で他の人を見ています。そして見下しているのです。自分はああいうろくでもない奴らとは違う、ああいう罪深いやつらとは違い。そうやって人と比べて自分が正しいものであることを神様に感謝しているのです。

さらに12節では「わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています」と自分の正しさを積極的にアピールしています。彼が週に二度行なっているという「断食」ですが、元々律法においては年に一度「贖罪日」に断食するよう定められているだけでした（レビ23:27-29)。しかし歴史の中でその回数が段々と増えていき（ゼカ 7:5)、当時のファリサイ派の人々は週に二回、月曜日と木曜日に断食をしていました（ルカ5:33)。このファリサイ派の人は自分が律法に定められている以上に頻繁に、週に二回も断食していることを誇り、自分の正しさを主張しているのです。さらに彼は「全収入の十分の一を献げています」と言っています。「全収入」とは「自分が手に入れたすべてのもの」という言葉です。「十分の一を献げる」ことは律法に出てきますが、そこでは畑でとれた穀物や家畜の十分の一を「主のもの」としてささげるよう定められていました（レビ27:30,32)。しかしファリサイ派の人々は穀物や家畜にとどまらず、家の庭で取れるような野菜やハーブなどのささいなものを含め、すべてのものの十分の一をささげていたのです（ルカ11:42参照)。それゆえ彼は自分が律法に定められている以上に徹底的に、手に入れたあらゆるものの十分の一を神様にささげている、そのことを自分の正しさとして神様にアピールしているのです。

・徴税人の祈り(18:13)

一方、徴税人の祈りは次のようなものでした。13節

「ところが、徴税人は遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った。『神様、罪人のわたしを憐れんでください。』」

「遠くに立って」とは、ファリサイ派の人から離れて、また神殿の建物から遠く離れて、ということでしょう。「罪に汚れた自分は聖なる神様に近づくのにふさわしくない」という彼の思いが現れているように思えます。ファリサイ派の人が堂々と立って祈ったのとは対照的です。さらに彼は「目を天に上げようともせず」と言われています。これは「目さえも天に上げようとはしなかった」という強調した言い方がされています。当時、祈りの姿勢として目を天に上げる（ルカ 9:16)、また手を上に上げること(Ⅰテモ2:8)がなされていました。しかし彼は手だけでなく、目さえも天に上げようとはしなかったのです。これと似た描写としてエズラ記9章6節の言葉があります。そこでエズラは次のように祈っています。お聞きください。

「わが神よ、御前に恥じ入るあまり、わたしは顔を上げることができません。わたしたちの罪悪は積み重なって身の丈を越え、罪科は大きく天にまで達しています。」

この徴税人も同じような思いだったのでしょう。自分が積み重ねてきた罪の大きさ、高さのゆえに恥じ入り、神様に向かって顔を上げることさえできないでいたのです。

さらに彼は「胸を打ちながら言った」とあります。「自分の胸を打つ」というのは悲しみや後悔を表わす動作です（ルカ 23:48)。彼は自分が犯してきた数々の罪と悪を後悔し、悲しみながら自分の胸を打ちたたいていたのです。そしてただ一言、次のように言いました。

『神様、罪人のわたしを憐れんでください。』

「憐れんでください」という言葉は元々「宥める、怒りを和らげる」という意味があります。そしてそこから「憐れむ、赦す、贖う」という意味も出てきます。この徴税人は自分が「罪人」であるということを認めつつ、その罪人であるわたしに神様が怒りを注ぐのではなく、憐れんでくださるように、お赦しくださるように、と請い願ったのです。

・神の判定（18:14）

そしてこのたとえの結論としてイエス様は 14 節で次のように言われました。

「言っておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」

ファリサイ派の人は、他の人を見下げ、自分の正しさを神様に感謝し、アピールしていました。しかし、神様によって義とは認められ家に帰ったのは、彼ではなく、徴税人だったのです。そしてその理由として「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」とイエス様は言われました。

②私たちにとっての意味・警告

・自らを省みる必要

この箇所で教えられている、神によって「義とされる」ということは使徒パウロもローマ書などで教えていることです。私たちは皆罪人であり、律法の行いによっては義とされ得ない。ただ信仰によってのみ義とされる。それは宗教改革者ルターが再発見した福音の真理であり、私たちはその宗教改革の流れを汲むプロテスタント教会に属しています。私たちは行いによらず、ただ信仰によってのみ義とされる。この信仰義認と呼ばれる教理は私たちが繰り返し教えられてきたことです。ではそういう私たちは今日の箇所から改めて教えられることは何もないのでしょうか。自分はファリサイ派のような祈りはしておらず、徴税人のような祈りをしているからだいじょうぶ、と簡単に言えるのでしょうか。私たちは信仰義認という教理を頭では知っていながら、実際にはここに出てくるファリサイ派の人のように自分と他人とを比較して、自分を正しいと考え、他人を見下す、裁くということしてしまってはいないでしょうか。あの人たちはあんなに悪いことをしている、不正を行なっている。それに比べれば自分はまだましだ、まだ良い人間、正しい人間だと考える。そうして他の人々見下し、裁くのです。またファリサイ派の人が週に二回の断食や十分の一の献げものを誇ったように、私たちもまた「自分は毎週に礼拝に出席している。これだけの献金をささげている。奉仕をしている。しかしあの人たちは…」と自分を誇りつつ、その基準に達していない他の人を見下げ、裁いてしまう。そのようなことをしてしまっていないか自らを真摯に省みる必要があると思います。私たちもそのようにしてしまう危険が常にあるのではないでしょうか。

・キルケゴールの指摘―偽りの謙遜

またキルケゴールというデンマークの哲学者はこの箇所について、次のような文章を記しています。

「いかにも信心深そうに、「神よ、私はこのパリサイ人のような人間でないことをあなたに感謝します」と嘆息する偽善者がいるものだ。…キリスト教が世に現れて、謙虚を説いたが、しかしすべての人がキリスト教から謙虚を学んだわけではなかった。偽善は変装することを学んだが、それほど変わりばえしないばかりか、むしろずっと悪くなったと言ったほうがよい。…誇りと虚栄とが高慢ちきに食卓の末席についた。」

ここにはキルケゴールの教会への批判があるのではないでしょうか。私たちはこの主イエスの教えを聞いてどうするのでしょうか。キルケゴールが言うように、「神よ、私はこのパリサイ人のような人間でないことをあなたに感謝します」と言うのでしょうか。もしそうであればそれは「偽善者」だ、変装した偽善に過ぎない、と彼は言うのです。「あの人はパリサイ人だ」と人を裁き、「自分はそうではない、模範的な徴税人だ」と自分を誇るならば、結局違った仕方で自分の正しさにより頼み、他人を見下してしまっているのです。それは本当の謙遜ではなく、偽りの謙遜だ、ということです。

それは表面的にこの徴税人のように振舞っても意味がない、ということでしょう。ファリサイ派の人が「週に二回している」と主張した「断食」も、元々は罪の悔い改め、嘆きや悲しみを表わすものでした。それは先ほど申し上げたように、律法においては断食が年に一回の「贖罪日」、すなわちイスラエル全体の罪が贖われる日に行うよう定められていることからもわかります。しかしその断食がいつの間にか単なる形式的なものになり、真の悔い改めではなくなっていたのです。そしてファリサイ派の人にとっては「週に二回も断食しています」と言うように、自分の正しさを誇るためのものでしかなくなっていました。それと同じように、たとえに出てくる徴税人のようにへりくだって祈るということも、もしそれが形だけのものとなり、そのことで自分の正しさを誇るということになってしまっては意味がない、元も子もないのです。

・私たちとは異なる神の判定基準

私たちはそのような過ちからいかにして自由になることができるのでしょうか。今日のイエスの様の言葉から教えられる大切なことは、私たちに人間の判断基準と神様の判断基準とは全く違う、ということです。私たちはしばしば自分と他人とを比較して、あの人は悪いことをしている、自分はそうではない、と判断します。それは人の表面的あるいは外面的な部分を見て判断しているということでもあります。あのファリサイ派の人はまさにそのようにして自分の正しさを確信し、他人を見下していたのです。しかしそういう判断は神様の前に全く通用しないのです。神様に義と認められて家に帰ったのは、徴税人であって、ファリサイ派の人ではなかったのです。それは一体なぜなのでしょうか。彼が祈りの中で言っているのことは嘘ではなかったと思います。彼は実際、奪い取ったり、不正を犯したり、姦通を犯したり、徴税人のような罪を犯してこなかったのだと思います。そして週に二度断食し、全収入の十分の一を献げて、真面目に熱心な信仰生活を送っていたのです。その彼がなぜ、神様によって義と認められないのでしょうか。なぜ多くの罪を犯してきた徴税人が神様によって義と認められたのでしょうか。これは考えようによっては不公平にも思えます。まじめな信仰生活を送ってきたファリサイ派の人がかわいそうだと思えなくもない。一体なぜなのか。イエス様はその理由として次のようにお語りになりました。14 節後半ですが、原文には「なぜなら」という言葉があります。
なぜなら、「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」からである。

「高ぶる」とは「自分を高くする」ということです。「へりくだる」とは「自分を低くする」ということです。ファリサイ派の人は確かにまじめに正しい生活をしていたのですが、それゆえに、高ぶってしまった、自分を高くしたのです。そして他の人を見下すようになった。神様はその驕り高ぶり、高慢のゆえに、彼を退け、低められる。彼を義とは認められないのです。反対に、徴税人はこれまで多くの罪を犯してきたわけですが、彼はその罪を心から悔い、悲しんでいる。そうして神様の前に自分を低くしている、

へりくだっているのです。それゆえに、神様は彼を高く上げられた、彼の祈りを聞き、彼を憐れんで罪を赦し、義と認められたのです。

神様が義とされるか否かの基準は、私たち人間が見るような表面的・外面的な事柄にはよらないのです。そうではなく、その人が神様の御前に自分を高くしているのか、低くしているのか、高ぶっているのか、へりくだっているのか、ということによるのです。それは表面的にへりくだっているように見せる、謙遜を装おうということでは意味がありません。それはキルケゴールが指摘したように「変装した偽善」に過ぎないからです。神様が見ておられるのはその人の心です。その人に打ち砕かれた心、悔いる心があるかどうかです。

結論：

さきほど読んでいただいた詩編 51 編はダビデが姦淫の罪を犯したときに詠んだものと言われています（1-2 節）。彼もまた神様に次のように祈っています。詩編 51 編 3 節 4 節

「神よ、わたしを憐れんでください／御慈しみをもって。深い御憐れみをもって／背きの罪をぬぐってください。わたしの咎をことごとく洗い／罪から清めてください。」

そして 18 節 19 節には次のようにあります。

「もしいけにえがあなたに喜ばれ／焼き尽くす献げ物が御旨にかなうのなら／わたしはそれをささげます。しかし、神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊。打ち砕かれ悔いる心を／神よ、あなたは侮られません。」

神様が私たちに第一に求めておられるいけにえは「焼き尽くす献げ物」ではなく、「打ち砕かれた霊、打ち砕かれ悔いる心」なのです。神様はそれを決して侮られません、軽んじられないのです。むしろそのようにへりくだり、悔いる者を、神様は憐れみ、赦し、義としてくださる、高めてくださるのです。

そして詩編 51 編の最後 21 節にはこうあります。

「そのときには、正しいいけにえも／焼き尽くす完全な献げ物も、あなたに喜ばれ／そのときには、あなたの祭壇に／雄牛がささげられるでしょう。」

私たちが神様の前にへりくだり、義とされる時はじめて、私たちの具体的なささげもの、すなわち私たちの礼拝や献金や奉仕も神様に喜ばれるものとなるのです。そのためにもまず神様の前にへりくだり、「神様、罪人のわたしを憐れんでください」と祈り続ける者でありたいと願います。祈ります。

祈り

神様、私たちは人の表面的な部分を見て、自分と人とを比較し、正しい、正しくないと判断をしてしまう愚かなものです。しかしあなたは私たちの心をご覧になっておられます。私たちが自分の正しさを誇り、高慢になってしまう罪に陥らないようお守りください。そして自分があなたの御前にふさわしくない罪人であることを自覚し、へりくだって、祈る者とさせてください。そうしてあなたからの憐れみを受け、義としていただくことができますように。そうしてあなたの御国に入ることができますように、わたしたちをいつも守り、導いてください。主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。